また，筑波研究学園都市の出現も，その影響を予想して，土浦市では様々の調査や計画等が現在行われている。

しかし，これらの性格は，土浦市の，独立した一地方中心地であるという基本的な性格を変える要素にはならないと思われる。土浦市が周辺農村地帯の中心地として発生し，長年にわたってその役割りを果たしてきたことは，土浦市にとって最も大きな背景であり，これは，土浦の変貌にとっての対象ではなく，その要因となるべきものと考える。

上信越高原国立公園における スキー場の立地条件に関する考察

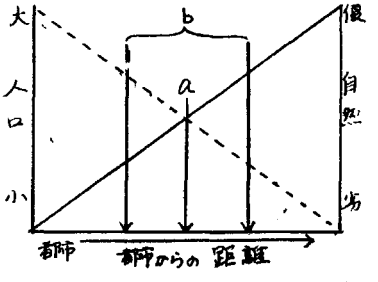
久　山　幹　子

現在，日本のスキー人口は800万人，あるいは，1,000万人ともいわれ，スキーはウィンタースポーツの中心的存在となっている。しかし，スキーの歴史を辿ってみると，これは第二次世界大戦後，特に1960年代以降の経済の高度成長，人口の都市集中にともなう1つの顕著な現象であり，大戦前とはまったく異なる型のスキーが行なわれていることがわかる。

そこで，本論文では5つのスキー場の比較考察という方法で，現在繁栄しているスキー場とはいかなる条件を備え，また，条件相互の関係や比重はどうなっているのかを探ってみた。研究対象としては，草津スキー場（群馬県吾妻郡草津町），志賀高原スキー場（長野県下高井郡山ノ内町），菅平スキー場（長野県小県郡真田町），苗場スキー場（新潟県南魚沼郡湯沢町），中里スキー場（新潟県南魚沼郡湯沢町）を選定し，これらはいずれも上信越高原国立公園内にある。スキー場の立地条件としては，自然条件，施設の整備，交通条件，宿泊施設の4つを取り上げ調査した。

スキー場の立地には，自然条件が最も重要かつ基本的条件であることは当初から推測されていたが，本論文を書き終え，より一層自然条件の比重の大きさが認識された。スキー客入込み総数を決定する最も基本的条件は，①滑走可能期間を決定する雪積量，②スキー場となる斜面を提供する地形，③スキー滑走の快適さを決める雪質の3つで，これらの備わった場所に適切な資本投下による施設の整備が行なわれると，大量のスキー客が入り込む。なお，本論文のフィールド内においては，交通条件は方面別入込み比率や利用交通手段別の比率を決定する条件の1つに留まり，また，自然条件，施設整備の劣ったスキー場の欠点補充的条件の1つにすぎない。宿泊施設も，立地条件として占める位置は戦前と異なり，間接的，付加的条件に後退している。

図1



a：資本投下により最も多量の入込みを期待できる地点
b：可能性のある範囲

ところで，施設の整備と宿泊施設は資本の投下によって改善可能なのに対し，自然条件と交通条件（都市からの交通時間距離）は人為による改善はごく限られている。この

見地から，日本全体では図1のような関係が考えられる。

上信越高原国立公園においては，各スキー場ともに比較的交通条件に恵まれているため，スキー客入込み数は，より一層自然条件に支配される傾向が強くなっている。

限界地における観光みかん園の存立要因

ー秩父東麓を例としてー

馬　橋　朋　子

秩父東麓の4地域（寄居町風布・小林，東秩父村堂平，都幾川村大附）ではみかん栽培が行なわれている。この地域はみかん栽培の限界地の一部となっている。それだけにみかん栽培にとっては厳しい自然的要因があり，これはこの地域のみかん園の分布やみかんの品質を大きく制約している。ここでは市場出荷ではなく観光みかん狩りを目的としている。論文では，なぜこの地域に観光みかん園が存立したのかを考え，その性格を出していくことを目的としている。

論文ではまず既存の資料からはたいへん把握し難い観光みかん園の実態を究明するために，この地域で中核的存在である風布を対象に詳しく調査した。そのひとつが，風布62戸全数対象のアンケート調査である。その結果，近年優利な農業的土地利用がないまま兼業化が進む中で住民にとってみかん園経営は兼業との両立が可能で，老人や婦人で管理できるという点が重要であることがわかった。また住民は自然破壊や俗化を恐れて積極的な観光開発を望んでないことが明らかになった。

この他，風布ではみかん園の分布を大きく制約している自然的諸要因（特に，小気候的要因）について調査した。その内容は，冬季の徹夜観測，昭和52年2月の寒害調査，6カ月間の自記温度計による気温の逆転現象の観測，可照時間測定，斜面傾斜度の調査等である。これをもとに小気候的諸要因がみかん園の分布を制約する大きさにより順位づけを行なった。その結果，①最低気温，②冬季の北西風，③谷の冷気流，④可照時間，⑤日射量，⑥（土壌水分）となった。さらにこの結果から風布におけるみかん栽培可能地の推定も行なった。第二章ではこのような調査を含めて風布における観光みかん園の存立要因をできるだけ詳しく考察した。

第三章では，秩父東麓の各地域についてみかん園の存立要因を考察した。これら4地域は自然的要因は共通のものが多いが，人文的要因（論文ではこれを大きく歴史的要因，社会的経済的要因，住民性に分けた）が少しずつ異なっているために現在の観光みかん園の状態は各々特徴を持っている。そこでこれらに注目しながら各地域の比較考察を行なって，存立諸要因の順位づけを試みた。なお存立要因を多角的に考察するために有効と思われる茶栽培地栗和田（東秩父村）を対象地域に加えた。

こうして導かれた観光みかん園の存立要因の順位は，①みかん栽培可能な自然的要因（ただし，みかん園の分布を規定している諸要因は副次的なものである），②社会的経済的要因（兼業化の促進，後継者不足等），③歴史的要因（みかん栽培の起源），④社会的にレジャーを求める風潮，⑤行政的指導と援助，⑥交通・位置・景観の要因，⑦住民性（熱心な農家の存立，経営への意欲）となった。そしてこの地域における観光みかん園の将来については，厳しい自然的要因により栽培地が制約され